『経験の歌』論（1）：「経験」の諸相

麻　生　雅　樹

〔抄録〕

本稿はブレイクの『経験の歌』の論考の第一部である。この第一部では『経験の歌』における主題を，性の問題，神の問題，時間と空間の問題の三点に大別し，「経験」の諸相を考察している。ブレイクの現実世界とヴィジョンの問題につながる考察である。

キーワード：経験，自由な愛，教会批判，時間と空間，理性

序　　論

1794年当時，ロンドンのラムベス（Lambeth）で彫版師をしていたブレイク（William Blake, 1757-1827）は『無垢と経験の歌』（*Songs of Innocence and of Experience,* 1794）という詩集を完成させた。しかし，詩集とは言うものの，それは詩と絵を組み合わせた版画をブレイク自らが彫版し，詩集の形で発表した彩飾本である。その詩集は，彼がそれ以前に単独の詩集として発表していた『無垢の歌』（*Songs of Innocence,* 1789）に，『経験の歌』（*Songs of Experience,* 1794）という表題で編まれた詩集が合本されたものである。

この合本までの過程において，彼の詩想にどのような変遷があったのか。そしてこの合本にはどのような意図があったのか。そのあたりの事情は，すでに幾人かの研究者によって分析がなされている。たとえば，梅津濟美氏は『無垢の歌』における外在的な神の愛や守りの強調，すなわち，ブレイクのその他の作品と比べると異質ともいえるブレイクの感情に着目する。そして，ブレイクの最愛の弟であるロバートの死を根拠にしながら，運命の絶大なる力に対するブレイクの一時的な宿命論的心境を説明し，神の愛に救いを求め，あるがままの現実を神の思し召しとして受けとめようとするブレイクの姿を浮き彫りにしている。さらに，『経験の歌』にみられるようなブレイクの革命論的なヴィジョンは，『無垢の歌』以前から存在しており，

ブレイクの壮年における生命力が『無垢の歌』によって中断されたその彼本来の「革命論的なヴィジョン」を取り戻させたと述べている。[1]

また，土屋繁子氏は，ブレイクのヴィジョンが現実世界に対してもっている先行性を指摘し，ブレイクがヴィジョンを全ての原点にしていたと主張する。そして，『詩的素描』（*Poetical Skeches,* 1783）や『無垢の歌』の中で歌われている，ブレイクが初めに見た「悦びのヴィジョン」とブレイク自身を取り巻く現実との落差が『経験の歌』を生み出したと説明する。「無垢」の悦びが時間との関わりによって堕落することで，悲しみへと「転化」したものが「経験」であり，「無垢」と「経験」は「表裏一体」をなしていると述べ，さらに，ブレイクが「無垢」のあとに「経験」のヴィジョンを付け加えたのは，ブレイクのヴィジョンが，時間を意識することによって，「空間から時間へ移行」した「経験」というヴィジョンの不安をそのままヴィジョン自体の中へ取り込んだためであり，そのようにブレイクのヴィジョンは「有機的」に「生成発展していく」ものだからであるとしている。[2]

これらの研究が明らかにしているブレイクの二つの面，つまり，現実を生きた生活者ブレイクと独自のヴィジョンの世界を構築した芸術家ブレイクの両面は，『経験の歌』を考察するうえで非常に示唆的である。なぜなら，ブレイクは『経験の歌』の中で，おそらくブレイク自身の経験による現実に対しての憤りから，徹底した現実批判を主観的な抒情詩の形式で歌いながら，その批判の根拠がラディカルであるがゆえに，明らかに彼のヴィジョンを志向していると考えられるからである。つまり，『経験の歌』において，ブレイクの現実批判は彼のヴィジョンと密接な関係を持っており，ブレイクにおけるこの現実とヴィジョンの相互関係に分析を加えることは，ただ単にブレイクが理想主義を振り回しているのではなく，現実に対して積極的に意味と価値を見いだそうとしていることを明らかにするものなのである。

そこで，まず，我々は『経験の歌』における「経験」の諸相を明らかにし，彼の現実批判の根拠を分析した後，ブレイクにとっての現実世界の意味と価値，そして，現実世界とヴィジョンの関係を考察してみることにする。

Ⅰ　「経験」の諸相

我々がまず『経験の歌』で目にするのが「序詩」（“Introduction”）であるが，その題名でも明らかなように，この詩は「経験」の世界を理解するうえでの羅針盤的な性格を担っている。つまり，この詩にはブレイクの現実批判の要点が語られているのである。さらに，『無垢の歌』の「序詩」で，ブレイクは「笛吹き」を登場させ，「無垢」の状態を歌ったように，ここでは「詩人」を登場させる。この詩の話者に予言者的な性格を帯びた詩人を配することによって，ブレイクはヴィジョンによる現状打破，現実世界への積極的な改革の意図を表明しているのである。この詩人の導入は，二重の視点の手法と呼べるものであろう。つまり，ブレイクは『経

験の歌』の諸詩において，ただ単に「経験」の状態，すなわち，現実世界の惨状を「経験」の世界に生きている人たちの視点から描写するだけに留まるのではなく，ヴィジョンを見ることのできる詩人をブレイク自らの分身として登場させることによって，ブレイクの現実批判とヴィジョンの喚起を詩の中に同時に内包させているのである。

そこで，実際にこの詩を読んでみると，まず，詩人が強い調子の命令形の言葉を第一行目で使いながら，堕落した「大地」(Earth) に呼びかける。「詩人の声を聞け！」と。

Hear the voice of the Bard!
Who Present, Past, & Future, sees;
Whose ears have heard
The Holy Word
That walk'd among the ancient trees,

Calling the lapsed Soul,
And weeping in the evening dew;
That might controll
The starry pole,
And fallen, fallen light renew!

"O Earth, O Earth, return!
"Arise from out the dewy grass;
"Night is worn,
"And the morn
"Rises from the slumberous mass.

"Turn away no more;
"Why wilt thou turn away?
"The starry floor,
"The wat'ry shore,
"Is giv'n thee till the break of day."[(3)]

現在，過去，未来を見ることのできる詩人は，現在の人間が陥っている悲惨な状態を的確に見抜く力をもっている。そして，彼は「古代の森を歩く聖なる言葉」('The Holy Word/That walk'd among the ancient trees') を聞いたと言う。よく指摘されるように，その言葉とは「創

世記」第３章第８節に書かれているエデンの園を歩く神の声であり，アダムとイヴをエデンの園から追放した神の声である。この詩人の超自然的な知覚は，明らかにブレイクのヴィジョンを暗示している。

エデンの園を追放され，堕落した状態にあるアダムとイヴは，今こそエデンの園への回帰が願われていると詩人は大地に告げる。詩人は，「星の極」（'The starry pole'）を支配し，堕落した魂を取り戻そうとしている。デーモンによると，星は理性を象徴している[(4)]。太陽とは対照的に，星は光るだけで熱を発しない。それは，感情に対する冷徹で非情な理性の煌めきなのである。大地は理性の「星の床」（'The starry floor'）に囚われ，時間と空間の「水の岸」（'The wat'ry shore'）にいる。大地は「眠りの塊」（'the slumberous mass'）に埋もれた「経験」の人間の魂を象徴している。大地が理性や時間と空間という認識の限界によって現実世界に閉じ込められ，絶望せざるを得ないことを詩人は知っている。詩人はこの現実世界が「本当の現実」の影に過ぎないことを知っているからである。しかし，予言者である詩人は，人間がヴィジョンを取り戻す「夜明け」（'the break of day'）が近いことを，そして，救いが来ることを最終連最終行で明かにする。

そして，それに続く詩である「大地の答え」では，大地が詩人の呼びかけに答え，「経験」の人間の陥っている状態を典型的に暴露する。この詩を全体的に吟味したいので，少し長くなるが全行を引用しよう。

Earth raise'd up her head
From the darkness dread & drear.
Her light fled,
Stony dread!
And her locks cover'd with grey despair.

"Prison'd on wat'ry shore,
"Starry Jealousy does keep my den:
"Cold and hoar,
"Weeping o'er,
"I hear the Father of the ancient men.

"Selfish father of men!
"Cruel, jealous, selfish fear!
"Can delight,
"Chain'd in night,

"The virgins of youth and morning bear?

"Does spring hide its joy
"When buds and blossoms grow?
"Does the sower
"Sow by night,
"Or the plowman in darkness plow?

"Break this heavy chain
"That does freeze my bones around.
"Selfish! vain!
"Eternal bane!
"The free Love with bondage bound."[(5)]

この詩によって，さらに細かく「経験」の諸相を考察することができる。大地は詩人の呼びかけに，「恐ろしく，物寂しい暗闇」（'the darkness dread & drear'）からその頭をもたげるが，「灰色の絶望」（'grey despair'）にうちひしがれている。この大地のおぞましい描写は読者を震撼させる。光を失った大地は希望を失った人間の姿であり，暗く，冷たいイメージによって描写される大地は，やがて，無機質的な性質を帯びはじめ，生気をぬかれた，ただの土へと還元されるかのようである。これほど残酷に現実世界の人間を描くブレイクの想像力は，ここにおいてすでに神話的であり，人類の歴史と現実世界の壮大な物語を象徴的に捉えるブレイクの熟練した技をかいまみることができる。

さらに，大地にとっての神は「わがままな父」（'Selfish father of men'）であり，その言葉は，旧約にみる父としての神に対する不信感を表明している。「重い鎖」（'this heavy chain'）に縛られた大地は，詩人が言うようなヴィジョンを見ることもない。大地は詩人の救いの予言を無視しており，少しも信じていない。このように，ブレイクの捉えた現実世界では，さまざまな抑圧が自由を奪い，人間を悲惨な世界に閉じ込めていることがわかる。その状態に大地を閉じ込めているのは，「わがままな父」を崇め，伝統的なモラルを強調し，人間の自由を奪う教会であるとして，ブレイクは教会批判を展開するのであるが，同時にまた，抑圧されている人々に対して，意識を高めることによる自己啓発を促してもいるのである。その点において興味深いのは，大地の悲惨な描写にもかかわらず，大地の言葉には意外なほどの力強さがみられることである。この力強さの原動力は怒りであり，神に対する闘争的感情である。

第三連において，その怒りを吐露した後，その連の後半と第四連で，怒りを鎮めるかのように，大地は抑圧による不自然さについて疑問を投げかける。その疑問文は，当然大地の不満を

表しているのだが，ここではまだその不満は抑えられている。効果を狙った技法的な視点からもいえることであるが，この疑問文から最終連の感嘆符つきの怒りの言葉へのつなげ方は圧倒的である。そして，ブレイクが大地の言葉によって示そうとした意図は，嘆きを怒りに変えること，現実世界を越えるためには闘争的姿勢が必要であるというところにあったのである。「経験」の世界において，怒りこそ意識を高めることの意味である。そう考えると，「自由な愛」（'free Love'）がスポイルされていることに対する大地の憤りが，いかに重要なものであるかが直接的に伝わってくる。

『経験の歌』の冒頭にこれらの二つの詩を配置したのは，ブレイクのヴィジョンと現実世界を対称的に描写しようとしたからだろう。このことから，『経験の歌』が「経験」の状態を示すだけではなくて，ヴィジョンをめぐるブレイクの積極的呼びかけがあることが当然予想される。

この二つの詩を通して，ブレイクが非難する現実世界がどのようなものであるかがおおよそ理解できた。大別すると，次の三つを挙げることができるだろう。

1．「自由な愛」が束縛されている世界
2．人々が既存の教会権力に支配されている世界
3．時間と空間に限られた世界

それでは，次に，その三項目を考察し，ブレイクの現実批判の戦略を検討してみよう。しかし，その前に少しこの三項目について説明をつけ加えたい。梅津氏は『経験の歌』の主題を，性の問題，教会の問題，社会の問題に大別して，鋭敏な考察をされており[(6)]，本稿の考察においても，この見解と重なる部分が多い。しかし，相違点は二つある。まず，一つは，梅津氏が教会の問題と社会の問題を区別しているのに対し，本稿ではその二つを一つのものとみなしていることである。なぜなら，ブレイクが『経験の歌』において社会の問題を扱う場合，その批判の対象は圧制者，つまり，王，貴族，僧侶，もしくは親などであるが，権威を持つ支配者階級としてそれらを括ることができるし，また，当時のイギリスの歴史的事実における王と教会の権力構造やブレイクの実際の主題の扱い方からみても，それらは同一視されていると考えても問題はないと考えるからである。二つ目は，時間と空間の問題を付け加えたということである。前述したように，『経験の歌』における現実世界の描写そのものに，ブレイクのヴィジョンへの喚起が常に内包されている。「経験」という現実世界の描写を通して時間と空間という認識の限界を指摘し，その超越を実現させることは，ブレイクにとって重要であった。それゆえに，現実世界における時間と空間の問題は，『経験の歌』の大きな主題となっていると考えるのである。

1．「自由な愛」

大地の答えの中には，「自由な愛」が束縛されていることに対する不満と憤りが述べられていた。ブレイクが主張する「自由な愛」とはどのようなものであろうか。ブレイクが愛について語るとき，当然若い男女の愛を念頭に置いていることが多いわけだが，『経験の歌』に登場する男女たちは愛の喜びを喪失し，まるで愛の貧血性に陥っているようである。ブレイクは本当の愛の姿を見失った者たちの不自由さを我々に見せつける。そして，その抑圧されて歪んだ「経験」の愛の形を浮き彫りにする。その抑圧に挑戦するためにブレイクが練りあげた論理と戦略は，当時の教会の度肝を抜く，そして，現在においてもラディカルといえるものだった。つまり，善と悪の道徳的価値逆転の論理によって，完全なる性の解放，欲望の解放を目指した。それがブレイクの主張する「自由な愛」である。

まず，「土くれと小石」（“The CLOD & the PEBBLE”）という詩をみてみると，その第一連で「小さな土くれ」（‘a little Clod of Clay’）が愛について自分の意見を歌う。

“Love seeketh not Itself to please,
“Nor for itself hath any care,
“But for another gives its ease,
“And builds a Heaven in Hell’s despair.”[7]

この連で歌われている愛は自己犠牲の愛である。その愛は自分自身を喜ばすことはない。それは伝統的なキリスト教においては理想的な愛かも知れない。しかし，実際において，その愛は自己欺瞞がたぶんに含まれているようにブレイクは感じた。第二連では，ブレイクの視点が挿入されていると考えられ，そこでは，自己犠牲の愛を歌った土くれが牛の足に踏み潰されてしまう様子が述べられている。土くれは踏まれれば簡単に形を変えてしまうものであるから，その描写には，土くれの自己犠牲が形の変わりやすいものとするブレイクの風刺が込められているにちがいない。それに対し，「小川の小石」（‘a Pebble of the brook’）が土くれを受けて歌うのは「相応しい歌」（‘these metres meet’）である。

“Love seeketh only Self to please,
“To bind another to Its delight,
“Joys in another’s loss of ease,
“And builds a Hell in Heaven’s despite.”[8]

小石の歌う愛は，自己中心的な愛で，他人の喜びを奪うことだけに終始する。その愛は小石の堅いイメージに見事に符合している。そして，小石の歌が「相応しい歌」であるのは，この

正反対の愛の形が，実は重要な共通点を有しており，そこに非難の的があることをブレイクが示したかったからであろう。なぜなら，自己犠牲の愛と自己中心的な愛は，そのどちらも他人と愛を共有することができないからである。他人の喜びを奪うだけの自己中心的な愛を，ブレイクが認めるとは考えられないが，教会の説く自己犠牲の愛も偽善として否定し，相互の愛の喜びを強調しているのである。ここにブレイクの教会のオーソドキシーに対するラディカルな恋愛観が端的に認められる。

次に，「天使」（“The Angel”）という詩をみてみよう。この詩の話者の女性は夢をみている。そこでは，天使に守られているにもかかわらず，なぜか悲しみが紛れない。そして，昼夜を問わず，泣き暮らしてる。彼女は天使に対して自分の喜びを隠してしまった。そんな彼女に手を焼いたのか，天使は彼女のもとを去る。

So he took his wings and fled;
Then the morn blush'd rosy red;
I dried my tears, & arm'd my fears
With ten thousand shields and spears.

Soon my Angel came again:
I was arm'd, he came in vain;
For the time of youth was fled,
And grey hairs were on my head.[(9)]

まず，一つ目の連（この詩の第三連にあたる）を解釈してみよう。天使が去った後，朝が訪れ，ばら色にその顔を赤らめる。これにはかなり性的なニュアンスが含まれており，ブレイクは，「自由な愛」の機会が到来したことをこの行に暗示させているのではないだろうか。そう考えると，天使が付き添っていた頃の彼女の嘆きが理解できる。つまり，天使は教会を象徴しており，天使の愛はモラルに縛られた，いわば「不自由な愛」だったのである。彼女自身それに気づいていた様子はないが，おそらく，彼女の性本能がその抑圧を感じ取っていたにちがいない。その本能はブレイクにとって生そのものであり，人間本来の自然な欲望である。心理的な方面から考察を加えると，彼女の悲しみの原因は，教会のモラルに植えつけられた性的抑圧からくるトラウマ的なものだったといえるだろう。この詩が『経験の歌』ではめずらしく夢の形を取っていることも興味深い。心理的な脅迫観念としてブレイクが教会のモラルを捉えていることが考えられる。

さて，やっと「自由な愛」の機会を得た彼女であるが，彼女が取った行動といえば，性的官能の喜びに対する拒絶反応だった。この反応は十分理解できる。この反応はブレイクの「自由

な愛」に対する自然な反応だろう。しかし，自然を自然としないところにブレイクの真骨頂がある。つまり，彼女の性に対する異常な嫌悪，恐怖を歌うことによって，ブレイクが言いたいのは，現実世界における愛の不毛についてだった。次の最終連を読めば，ブレイクの意図がわかるだろう。結局彼女は年を取り，天使さえも相手にできなくなる。この彼女の愛に対するブレイクのシニシズムは，ブレイクが「自由な愛」を提唱するための戦略の一つである。

ブレイクが用いたもう一つの方法は，もっと直接的に怒りを表現することだった。「一人の失われた女の子」（"A Little GIRL Lost"）の詩の冒頭に掲げられているエピグラフによって，ブレイクの愛の抑圧に対する憤りをみることができる。

Children of the future Age
Reading this indignant page,
Know that in a former time
Love! sweet Love! was thought a crime.[10]

書かれている以外のどんな意図もここには感じられない。このエピグラフを書いた現在において，ブレイクの信じた理想の愛が断罪されていること，それに対してブレイクが激怒していること，未来の子供たちにその断罪がいかに不当であったかを訴えかけていること。きわめてシンプルである。

罪にもいろいろあるが，「自由な愛」が犯罪であるとすれば，ブレイクは信念を貫き通す，根っからの政治犯のイメージにかなり近いといえるだろう。このエピグラフは世界の改革を目指す革命家のイデオロギー宣言といった感じを彷彿とさせる。時代が変われば世界も変わる，必ず未来の子供たちには理解してもらえる，「自由な愛」の実現のためには闘争的姿勢が必要だ，そうブレイクは信じていたのかも知れない。ブレイクはいつもただ信じるところにしたがって書いた。それほど純粋にヴィジョンを見ていた。しかし，彼の想像力は，計らずもショック療法的な効果を生みだすことになったのである。彼は首尾一貫して愛の不毛の惨めさを描写する。

To her father white
Came the maiden bright;
But his loving look,
Like the holy book,
All her tender limbs with terror shook.[11]

この詩でも，女の子であるオーナの愛情が抑圧される。そして，ここでは父親がその批判の

対象である。父親の顔は「聖なる書」（'holy book'）のようであるという言葉から想像できるように，父の表情には，既存のキリスト教が教えるモラルが象徴されている。オーナの愛が，教会のモラルに対立するものであるかどうかはさだかではないが，オーナが父の前では恐怖に震えてしまって，自分の愛を正直に語ることができないのは，教会のモラルに対するうしろめたさと，そのモラルに反抗する勇気を持っていなかったからだ。すでにオーナの心は閉ざされてしまっている。

「自由な愛」の抑圧は，しばしば，生そのものの否定につながる。ブレイクは『天国と地獄の結婚』（*The Marriage of Heaven and Hell, circa* 1790-93）にも，「活力こそ唯一の生命である」[12]と書いた。「活力」とは理性と対立する人間の生命力であるが，『経験の歌』との関係で言えば，欲望や自然な欲求と同一視してもよいだろう。そして，逆に言えば，欲望や欲求を失うことが死を意味する。ブレイクにとって，欲望を抱くことが生であり，欲望を抑圧されてしまうことが死であった。その意味において，「病める薔薇」（"The SICK ROSE"）には命の破壊が描かれている。

O Rose, thou art sick!
The invisible worm
That flies in the night,
In the howling storm,

Has found out thy bed
Of crimson joy:
And his dark secret love
Does thy life destroy.[13]

「目に見えぬ虫」（'The invisible worm'）が何を象徴しているかの議論は，多くの研究者によってなされており，その議論では『天国と地獄の結婚』における「地獄の格言」（"Proverbs of Hell"）の一つがよく引用される。

As the catterpiller chooses the fairest leaves to lay her eggs on, so the priest lays his curse on the fairest joys.[14]

「病める薔薇」の挿絵に描かれている「目に見えぬ虫」は芋虫のようである。そこからも「地獄の格言」との連関が生まれてくるのであるが，第二連の「黒い秘密の愛」（'dark secret love'）という言葉にも僧侶との連関が読み取れる。なぜなら，ブレイクはしばしば教会や僧侶

を黒で象徴するからである。第二連の「汝の深紅の喜びの寝床」（'thy bed/Of crimson joy'）や「黒い秘密の愛」という言葉の解釈によって，僧侶に対する性的な内容も読み取れるわけであるが，従来の多くの解釈はその読みを踏襲している。しかし，僧侶と性的欲望を結びつけると，最終連の命の破壊の意味が生きてこないのではないだろうか。つまり，ここでもブレイクのおなじみの主題である，僧侶による性的欲望の抑圧と捉えるほうが妥当だと考えるのである。そこで，全体的な解釈を試みると，ささやかながら「自由の愛」の喜びを見いだしていた薔薇は，僧侶の目ざとさによってその非道徳的な愛を見つけられてしまい，薔薇の喜びは，僧侶の「黒い秘密の愛」，つまり，教会のまやかしの神，「わがままな父」の愛のモラルによって，強制的な修正，指導を受ける。このような精神的矯正力は愛の美を完全に破壊する。くだんの薔薇もやがて精神的死を迎えるにちがいない。それゆえにブレイクは「薔薇」のことを「病める」と表現したのである。

以上みてきたように，「自由な愛」とは，性の解放であり，強いては欲望の完全なる解放を目指したものだった。これらは非常にラディカルなものであって，読者にもかなりの衝撃を与えるだろう。しかし，「経験」の世界における愛の抑圧は，ブレイクの考える影の存在でしかないこの現実世界の中で，ブレイクが見た数少ない真実であって，リアルなものだった。そして，それを乗り越えるために，ヴィジョンの世界における真実を現実批判の展開で反証するという対抗手段をブレイクは取った。ブレイクはヴィジョナリーとして見たままの真実を語ったのであるが，その内容が我々に与える衝撃は，ヴィジョンへの超越を実現するための戦略という副作用を生みだした。

最後に，欲望の解放を目指すブレイクのラディカルさを示す好例を引用しよう。さきに引用した「地獄の格言」からの別の格言である。

> Sooner murder an infant in its cradle than nurse unacted desires.[09]

欲望は大事に育てるだけのものではなく，解放するものであるとするこの格言は，読者を震撼させる。しかし，ここには価値逆転の単なる手法としてのサーカズムではなく，スウィフトばりの辛辣で深刻な現実批判が含まれている。

2．教会批判

「経験」の世界における神の観念は，すべて伝統的な教会の教義に基づいている。そのために，人々は誤った神に祈りを捧げているとブレイクは考えた。この教会批判は，『経験の歌』に多数散在している。教会批判は『経験の歌』の中で最も特徴的な主題である。すでに，今までの考察においても，再三のように教会批判が繰り返されていた。また，どの研究者でも，その問題に言及しないことは皆無であり，かなり議論し尽くされているといってもいいだろう。

そこで，あまり細かい考察は回避して，重要な点を再考察するにとどめるのがよい方法だと思われる。

「人間抽象」（“The Human Abstract”）の第一連では，教会が善とする憐愍と哀れみが，欺瞞として痛烈に風刺される。慈悲と憐愍を説く教会は，聖なる怖れをもって人々を支配し，神秘を振り回すことによって人々を恐怖の虜にする。「愛の園」（“The GARDEN of LOVE”），「小さなごろつき」（“The Little Vagabond”），「失われた一人の小さな男の子」（“A Little BOY Lost”）にはそれぞれ，子供の喜びや欲望が教会の権威によって否定され，抑圧され，断罪されるというテーマが繰り返し歌われている。

さらに，「聖木曜日」（“HOLY THURSDAY”）において，ブレイクは社会的抑圧の主題を扱い，教会をはじめとする特権階級の偽善を批判した。この詩は，ロンドンに実際見られた貧民学校の生徒たちの様子を描いたものである。『無垢の歌』の同名の詩の中で祝福された子供たちとは全く正反対に，この詩で歌われている子供たちの置かれている状況は，金や権力をもつ特権階級によって作り出された救いのないものである。

Is that trembling cry a song?
Can it be a song of joy?
And so many children poor?
It is a land of poverty!(10)

神に向かって震えるような声で讃美歌を歌う子供たちの姿に，特権階級の偽善が表現されており，その偽善がブレイクの非難の的になっている。その非難がどれほど強いものであるかは，疑問文から感嘆符に至る，という「大地の答え」でみた形式のパターンを踏襲していることからも推し量ることができるだろう。子供たちにはロンドンに神がいるのかどうかもわからないだろう。なぜなら，神は目に見えず神秘のベールに包まれているからである。

『経験の歌』の詩の草稿などが書かれているブレイクの「手帖」に書かれている「ノーボダディーに」（“To Nobodaddy”）という詩に，そのような神に対する疑念が歌われていることはよく指摘されることである。その詩によれば，神は人間の目には見えず，常に沈黙している。神を捜し求めても雲の中に隠れて姿をみせない。神の言葉や掟の中には，いつも「暗さと曖昧さ」（‘darkness & obscurity’）が存在しているという。その神は教会だけに存在しているとブレイクは感じた。教会はその神を利用して愛の欲望を抑圧し，大人たちを飼い慣らし，子供たちの元気な，健康的な心を抑圧する。このような教会による抑圧の構造がブレイクの教会批判の基本的な論理である。

「ロンドン」（“LONDON”）でも，ブレイクは特権階級をその非難の標的にしている。ロンドンの人々の表情は，精神的支柱を失ったように，弱く悲しみに満ちている。「心が鍛えた枷」

('The mind-forg'd manacles') は，王の圧制や教会が，どれほど人々の魂を縛り，食い込んでいるかを表わしている。また，「黒ずみゆく教会」('black'ning Church') という言葉は，教会が人々の魂を救うことをせず，それどころか，禁欲や労働の奨励などによって，逆に人々を悲惨な状態に追い込んでいることを予想させる。

以上のような教会批判によって，ブレイクは教会が唱える神の不在を宣告した。教会のオーソドキシー批判におけるブレイクの戦略の一つは，『天国と地獄の結婚』にみられるように，ヴィジョンに裏打ちされた価値逆転の論理とサーカスティックな手法であるが，『経験の歌』では，より純粋にブレイクの感情を込めて教会を批判する方法を用いている。これは，『経験の歌』の目的の一つが，抒情詩において，教会のモラルによる抑圧がいかに人々の心を蝕んでいるかを描写するということであったからでもあるが，ヴィジョンよりも，現実へのブレイクの関心の高さを示すものであろう。

3．時間と空間

『経験の歌』における時間と空間の重要性は，「序詩」における詩人と大地の関係からうかがうことができる。「序詩」では，現在，過去，未来をみることのできる詩人は，現在だけをみることしかできない大地と明らかに区別されている。詩人は時間の束縛から解放されているため，特定の空間から分離されることになり，詩人の存在空間の概念が相対的なものとなる。それに対して，大地は特定の時間と空間の中でしか存在できない。「序詩」を考察したときに述べたように，それは「水の岸」に囚われている大地の姿としてブレイクが歌ったものである。

ブレイクにとって，このような現実世界からヴィジョンの世界への認識的転換の過程は連続的なものかも知れないが，「経験」の人間にとって，両者の間に越えることのできない非連続性がある。その現実とヴィジョンの非連続性こそが時間と空間の本質を明らかにし，現実世界における経験の限界を示している。

現実世界における経験が，時間と空間という認識の限界を基準としており，その基準は人間の認識の本質的な部分に関係しているために，詩人の主張する救済のヴィジョンを理解することが大地にとって非常に困難であることはごく自然なことである。しかし，ブレイクがヴィジョンを語るとき，常識をこそ否定し，時間と空間の超越が，直接人間の魂の救いと結びついているところに，『経験の歌』の詩の重要性がある。つまり，現実世界，時間と空間からの解放を反証の形で提示する『経験の歌』の諸詩は，我々の想像力を喚起するのである。

「ああ！ひまわりよ」("AH! SUN-FLOWER") では，時間と空間の限界が，精神的な絶望感を生みだしている。

Ah, Sun-flower, weary of time,

Who countest the steps of the Sun,
Seeking after that sweet golden clime
Where the traveller's journey is done:

Where the Youth pined away with desire,
And the pale Virgin shrouded in snow
Arise from their graves, and aspire
Where my Sun-flower wishes to go.[17]

「時間に倦む」（'weary of time'）ひまわりは，それでも「太陽の歩み」（'the steps of the Sun'）を数えることを止めることはできない。大地に生えているひまわりが，その顔だけを動かして太陽が刻む時を見つめている姿は，現実世界における人間の悲壮な姿を彷彿とさせる。「ところ」（'Where'）に導かれている節の反復は，空間的思考の空しさを象徴するかのようである。

このような，時間と空間に対するブレイクの意識の高さは，おのずからヴィジョンを志向していくことになる。ブレイクは現実世界で人々がどのような苦しみを受けているのか，そしてその苦しみはどこから，どのようにもたらされるのかを明らかにしようとして『経験の歌』を書いた。このときの感情は現実世界を生きる生活者ブレイクのものである。しかし，『無垢と経験の歌』の副題である「人間の魂の二つの相反する状態を示す」（'Shewing the Two Contrary States of the Human Soul'）からもわかるように，ブレイクが人間の悲しむ姿をさまざまな抑圧によって拘束された魂の「状態」（'State'）であるとみなすとき，ブレイクは，まさに彼が言うところのヴィジョンを通してこの現実世界を見ているのである。現実世界を神話的ヴィジョンで再構成すること，つまり，多重的な時間と空間の原理を用いて，時間と空間の限界内にある現実世界と時間と空間の限界から解放されているヴィジョンの世界を融合することがブレイクの関心を捉えたのである。

中間考察　理性の問題

ブレイクにおいて，愛の抑圧や教会批判は常に理性の問題を含んでいる。「経験」の諸相を理性による欲望の抑圧をうけた人間の魂の「状態」と捉えたブレイクは，すでに現実とヴィジョンとの境界線を消失している。ここでは，理性に対するブレイクのヴィジョンを考察してみよう。現実とヴィジョンの問題につなげたい。

ブレイクの教会に対する憤りは，直接的，間接的に表現され，その批判の言葉は強烈である。教会批判という現象が，当時の啓蒙主義者たちによって盛んに行われたという事実を考慮

に入れると，ブレイクの教会批判はそれほど特異なものではないといえるが，しかし，彼がその啓蒙主義者たちをも批判の対象とし，孤独な道を歩んだのは，ブレイクの宗教的信念のラディカルさゆえのことであった。それは理神論に対するブレイクの反発から導きだされたものである。理性による真理への到達の不可能性，理性による認識の限界を主張するものであった。理性を狭い認識能力であると考えたブレイクは，理性を教会のモラルと同一視した。理性に対する批判は，ブレイクがロック，ベイコンやニュートンに対して批判を加えたという事実によってもうかがうことができる。

ブレイクはすでに，『自然宗教はない』（*There is no Natural Religion, circa* 1788）と『全ての宗教は一つ』（*All Religion are One, circa* 1788）において，彼独自の宗教的信念を表明していた。それらは，理性の限界を指摘し，それによって人間はどんな真理をも見いだせないことを説いている。理性を越えた感覚的な（ブレイクは詩的と読んでいるが）想像力が真理を見いだす唯一の方法なのである。このようにして，ブレイクは人間がもっている「詩的創造力」（'Poetic Genius'）を神格化するのである。こうして人間の内的神という概念が形作られた。これによって，ブレイクは人間を神と同一視してゆくのである。

理性の批判はその狭い認識を指摘することで行われる。「虎」（"The Tyger"）はそのような理性によっては理解できない詩的創造力の力強さを物語っている。

Tyger! Tyger! burning bright
In the forest of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?[18]

この詩の大半は疑問文で構成されている。このことは，話者の心理状態を的確に表現している。彼は虎のもつ圧倒的な力強さを感じて，それを邪悪なものと捉えている。彼はどうしても虎が羊を作った同じ神によって作られたとは思えない。この創造主という神の概念もブレイクにとっては一面的であり，教会のオーソドキシーの誤りを象徴するものだったのであろう。理性によってはこの虎を理解することは不可能である。ブレイクは既存の教会が悪として退ける欲望を虎で象徴し，理性の限界を主張しながら，「経験」の人間の狭い認識を非難しているのである。

理性の問題にとりつかれてから，ブレイクにおける現実とヴィジョンの境は完全に消失したといえる。そして，目に見える現象と，ブレイクのヴィジョンでの精神的な力学的現象が同一視されるのである。この類まれな想像力を有したブレイクにとって，現実世界の意味とは何であったか。ブレイクの現実とヴィジョンの関係を稿をあらためて論じることにしよう。

註

(1) 梅津濟美著，『ブレイク研究』（八潮出版社，1977），pp.369-372

(2) 土屋繁子著，『ブレイクの世界 ― 幻視家の予言書 ―』，研究社選書５（研究社，1978），pp.22-23

(3) Geoffrey Keynes, ed., *The Complete Writings of William Blake,* Oxford University Press, London. 1966, 210

(4) Samuel Foster Damon, *A Blake Dictionary,* E. P. Dutton & Co., Inc, New York. 1971, 386

(5) Keynes 210-211

(6) 梅津，『ブレイク研究』p.321

(7) Keynes 211

(8) Keynes 211

(9) Keynes 213-214

(10) Keynes 219

(11) Keynes 219

(12) Keynes 149

(13) Keynes 213

(14) Keynes 152

(15) Keynes 152

(16) Keynes 211-212

(17) Keynes 215

(18) Keynes 214

（あそ　まさき　　文学研究科英米文学専攻博士後期課程）（1996年10月16日受理）